



第2分科会 高等教育政策

メタデータ	言語: ja 出版者: 大学図書館問題研究会 公開日: 2016-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008598



第2分科会 高等教育政策

著者	千葉 浩之
雑誌名	大学の図書館
巻	34
号	12
ページ	230-230
発行年	2015-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008598

第2分科会 高等教育政策

＜参加者＞ 10 名

＜担 当＞ 鈴木正紀、赤澤久弥、
小笠原玲子

＜司 会＞ 赤澤久弥

＜記 録＞ 赤澤久弥

本分科会は1990年代以降の高等教育政策の振り返りと今後の展望の議論とを狙いとした。なお、高等教育政策が分科会で取り上げられるのは第33回以来実に13年ぶりである。

はじめに、文教大学の鈴木正紀氏より池内了著『大学と科学の岐路』を要約するかたちで発表があった。池内によれば、「大学への国家の介入が強まった」1990年代以降の大学改革（大学設置基準の大綱化、大学院重点化、国立大学の法人化）とそれに伴う大学の変容（国立大学の予算削減、教職員の多忙化、いわゆる「評価漬け」による疲弊、今後進むであろう国立大学の種別化等）により「今、大学と科学をめぐる状況が大変な状況を迎えている」。また、諸外国との比較に基づき、日本の高等教育の特殊性（GDP比0.5%という低い高等教育費、私立大学が引き受ける学生の多さ（全学生の75%）、国立大学の授業料の高騰等）も指摘している。

次に、鈴木氏の発表を踏まえて参加者同士で、他大学の実情への質問や報告、意見交換を行った。話題は以下のとおり多岐にわたった。競争的資金獲得のための支援として何か行っているか（大学によってはURAやFD担当部署が科研費申請書の書き方講習会を開いている）。国立大学と私立大学では、経営層や管理職の意識に違いはあるだろうか。教育の質をどのように評価しているか（大学によっては卒業生に、できるようになったことをアンケート調査している）。社会への人材輩出の観点から学生にいかに幅広い教養を身に付けさせられるだろうか。逆に初等・中等教育におけるアクティブ・ラーニングの実情

はどうか（まだ一部にとどまっているようである）。2018年問題を控えて大学は学生の取り扱いではなく、連携や協働といった知恵のあるやり方を模索する必要があるのではないか。いわゆる「上から」の政策を批判するばかりではなく、高等教育の現場から提言する仕組みが必要ではないだろうか。その場合、大学図書館はどのような役割を果たせるだろうか。

最後に、担当より、高等教育政策は常に変わっていくであろうから再びこうした大きな枠組みで議論を行いたいとの言葉があった。

大学図書館が大学に属する以上、私たちは高等教育政策により注意を払わねばならないだろう。本分科会は、ふだん日常業務の背景に埋もれがちな高等教育政策に目を向け、さらに様々な立場の参加者から立ち入った話を伺える得難い機会であった。

参考文献

池内了、大学と科学の岐路、東洋書店、2015

吉見俊哉、大学とは何か、岩波書店、2011

（千葉浩之）